

金芝河作品集

2



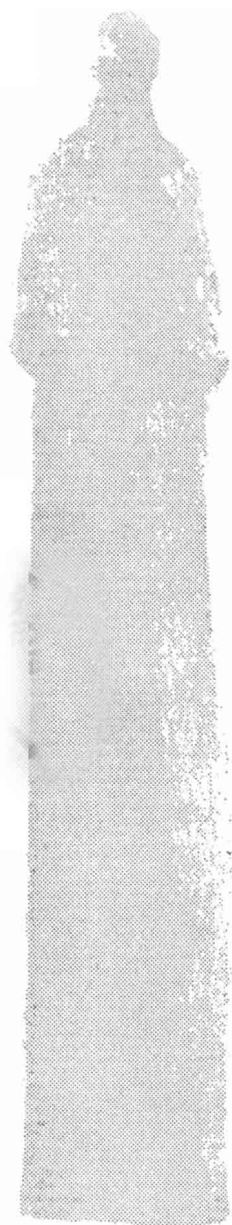
井出愚樹編訳
青木書店

金芝河作品集

1

井出愚樹編訳

青木書店



い て ら じゅ
井 出 愚 樹

1937年 高知県に生まれる

訳 書 『わが魂を解き放せ』(大月書店, 1975年)

『良心宣言』(大月書店, 1975年)

『金芝河作品集 1』(青木書店, 1976年)

金芝河作品集 2

1976年 5月 5日 第1版第1刷印刷

1976年 5月15日 第1版第1刷発行

* 定価はカバー, 売上カードに表示

著 者 金 芝 河

編訳者 井 出 愚 樹

発行者 山 根 襄

発行所 株式会社 青 木 書 店

東京都千代田区神田神保町1-60

振 替 口 座・東京 8-36582 番

電話・東京 (292) 0481 (代表)

郵便番号 101

(分)0098 (製)8177 (出)0015 第一印刷・高地製本

© 1976, Aoki-shoten, Tokyo

目次

詩

I 闇と炎の日々……………2

山亭里日記 2 夕暮れの物語 5 雨降る夜 8 太陽は人

の 10 魔屋 13 裏通りのどぶ鴉ヶ原 15 水流れるところ

に 18 智異山 20 刀よ 23 ドンドン 25 青い空 白い雲 27

風あらしき日 29 早瀬(一) 32 早瀬(二) 35 明け方二時 37 本

(あるいは「金珠暎伝」) 38 星の光すら見えない夜 42 あやつ

り人形 43 明日の花嫁 47 教会の鐘は 48 涯 48 待機 50

II 独裁に抗して……………51

空山 51 モレネ 53 綱渡り 55 詩 58 初めての微笑 60

一九七四年一月 63 海で 66 ソウル 68 不帰 70 道 73
 あなたの血 74 騎馬像 77 夜の国 79 灼けつく渴きで 80
 西大門百一番地 83 成長 84 飢え 86 月が見えかくれ
 し 88 鳥 89 落書(一) 91 落書(二) 92 絶叫 93 韓国・一九七
 一年四月 98

Ⅲ 獄中の詩^{うた}

地獄(一) 102 地獄(二) 106 地獄(三) 111 ラッパの音 114 夏の監
 房で 116 三千里独歩権 118

長詩

糞氏物語

戯曲

金冠のキリスト

*

宣言文	265
控訴理由書	269
正義具現全国司祭団 神父様方に	277
讃美歌 縛られた手の祈り	282
ある日の日記	286
作品解説	288
金芝河——その人と時代	291
訳者後記	309
年 譜	314

詩

I 闇と炎の日々

山亭里日記

サンジョンリ

私を

ここに縛りつけるものはなにか

灼けつく陽光の下 白く光るのみ

よどみ流れぬ池に深く潜^{ひそ}み

あくまで私をここに縛りつけるものはなにか

目にまばゆい赤茶けた山道

かすかにゆれる白い野花さえ

真近に炸裂する発破はっばの音さえはるかに遠く

土に閉ざされた苦役も 死すらも

私を目覚めさせない

おぼろなカンテラの灯が

胸をしめつける焼酎に酔いしれた夜

しわがれた歌と 刃物をちらつかせて明かす夜ごと

目を見開き夜を明かす わけ知らぬ身ぶるいに

しっかりと私を縛りつけるものは

ああ それは はたしてなにか

醒めてもいず眠ってもいない

はてもない 声なき この哀しみはなにか

夜ごと酔って泣いた

赤目の海州^{ヘジユ}おやじは死んでしまった
十六になるそばかすの子も
酔ったまま眠れない

どこに來ているのか
私は生きているのか
鈍い感覚と鋭い暗闇が真向かい
混ざりもせず ぶつかりもしない
ふたたび真っ青なあかつきがくる

発破が爆発する

トロッコが帰ってゆく
私は土のなかにゆっくりと深く
真昼のなかに 真っ白な眠りの沼のなかにおちこんでゆく
これはいったいなんだ

夕暮れの物語

小皿に土を盛った
指輪は土のなかに
夕暮れのなかに
ある

木は語らぬ
馬ははるかな道を駆けながら
だれかの唇は
動こうとするがまたも閉じてしまうのだ

皿が割れたのは
ひびのはいった
崩れた石柱の下か

岩の下 皿のかけらの割れたひとかけらに
わが指紋はある

ぼくらはあまりにも首を長くしすぎているが

白い道が 蕨^{わろひ}で黒ずんでくたびれているかも知れぬ

たぶん月が昇れば

君がその手で ぼくの手をしっかりと握りしめてくれさえすれば

あるいは

それは

たぶん

完全に鉱石かも知れぬ

だが

冷えきった君の顔 だが

だが 君の唇は血のしたたるひび割れの多いことを
木はやはり語らぬ

冬が一つずつ

紅色の鏡のなかを過ぎ行くが

かくも過ぎ行くが

木はやはり語らぬ

長い馬のいななきの果てに昇る月

月の光で描かれた皿に

あえて 真紅の皿に

土を盛るが

白い麻の衣 わが倒れる夕暮れには
指輪と いまや

皿は もはや
ない

雨降る夜

いまはいずこに
私を迎えた灯影おぼろなあの軒下
せわしげに靴をひきずつた音よ
いまはいずこに

なれ親しんだ大路が
土の香りなつかしい 雨降る夜に
どこか やるせなかった心
いまは固まり つれなくも石となるのか

荒れはてた 果てなく遠い道のりをたどりつき

疲れた心が 村の入口に足を踏みいれるときの哀しみよ

あれほど心悩ませたみずぼらしい影

いまはことごとく去り行き 消えはてた夜

泣いてくれ

蛙よ 私のために思いきり泣いて

雲低く流れる あのはるかな峠をまたも越えて

みはるかす野を 果てもなくさまよい行く私を 狂おしく泣いてくれ

見つめあう顔も

差しだす手もいまはない

かつては胸焦がした あんどんの灯のまどかな微笑^{ほほえみ}よ

ああ いまは どこかで固まり つれなくも

石となるのか
石となるのか

太陽は人の

太陽なんて

人の足ほどの広さしか持っちゃいなかったよ
だれ一人 やって来る

やって来る あのだ巻を知りやすまい

野原じゃ しかし

草の葉すら風にゆらゆら舞ったことを

ときには風は山さえ動かしたことを

片時もざわめかぬ波がないように

古い刀はやがては刃がこぼれたさ 知っているか

風がたえず吹き渡り 音をたてても知りやすまい

太陽なんて人の足ほどの

広さしか持つちゃいなかったよ 太陽は馬鹿だよ

火で鍛えた鋼鉄が火のなかに溶け

水で育てた都市が水のなかに眠りこけたのを

だれもいまは知りやすまい

露地では夜ごと

うなされた人のうめきが洩れでて

ときに 人びとは狂っちゃったよ 知ってるのか

刃がこぼれたことを知りやすまい

そうだろう

知っているのか知らないのか

片時だって鞭打たれぬ夜があったのか